

A 語句の意味と読み

- (1) 求婚し続けていた / 「よばふ」＝求婚する
- (2) やつとのこと・かろうじて
- (3) 荒れ果てて、すきまだけである
- (4) やなぐい／矢を入れて背負う道具
- (5) どうにもならない・かいがない
- (6) とても～できそうにない（不可能）

B 文法

- (7) 不可能（～できそうにない） / 上に「え」があるのが手がかかり
- (8) 已然形（「行きけれ」）に接続し、順接の確定条件（～したところ・～ので）を表す。
- (9) 係助詞「なむ」を受けて、結びが連体形になっているから（係り結び）。
- (10) 打消の接続助詞「で」 / ～ないで
- (11) 他に対する願望を表す終助詞「なむ」（～てほしい）と取るのが一般的。教科書によっては、強意（確述）の助動詞

「ぬ」の未然形＋意志・願望の「む」と説明することもある。
／★お使いの教科書の説明に合わせる

- (12) 反実仮想 / 「～ましものを」＝～だったらよかったのに

C 主語と指す内容

- (13) どちらも男
- (14) 草の上に置いていた露
- (15) 女を取り返しに来た者たち（女の兄にあたる人々）。女は二条の後（藤原高子）で、兄の基経・国経が連れ戻したと伝えられている。

D 口語訳

- (16) とても自分のものにできそうになかった女のもとに、何年もかけて求婚し続けていたが、
- (17) （女が男に）「あれは何ですか」と。
- (18) （女は）「ああ、大変」と言ったけれど、雷の鳴る騒がしさで、（男は）聞くことができなかった。
- (19) （あれは）真珠なのか、何なのかとあの人が尋ねたときに、「露だ」と答えて、私も露のように消えてしまえばよかったのに。

E 内容・記述（解答例）

(20) 露さえ知らないほど、深窓で大切に育てられた高貴な身分の女性。

(21) 連れ出した女（露を尋ねた女）

(22) 美しくはかなく、すぐ消えてしまうものとして女を表し、その死のはかなさと、失った悲しみを強めている。

(23) 実際には自分は生き残ってしまった。あのとき女と一緒に露のように消えてしまえばよかったのに、という深い後悔と嘆き。

F 文学史

(24) 歌物語／在原業平／平安時代（前期）

(25) 『大和物語』（『平中物語』でも可）

(26) 六歌仙

【現代語訳（全文）】

むかし、（ある）男がいた。とても自分のものにできそうになかった女のもとに、何年もかけて求婚し続けていたが、やっとのことで盗み出して、たいそう暗いなかを連れて来た。芥川という河のほとりを連れて行ったところ、草の上に置いていた露を（見て）、「あれは何ですか」と男に尋ねた。

行く先はまだ遠く、夜もふけてしまったので、鬼のいる所とも知らないで、そのうえ雷までもたいそう激しく鳴り、雨もひどく降ったので、荒れ果てた蔵に、女を奥に押し入れて、男は弓とやなぐいを背負って戸口にいた。「早く夜も明けてほしい」と思いながら座っていたところ、鬼が女をあつという間に一口で食べてしまった。（女は）「ああ、大変」と言ったけれど、雷の鳴る騒がしきで、聞くことができなかった。

だんだんと夜も明けていくので、見ると、連れて来た女もいない。地団駄をふんで泣いたけれど、どうにもならない。

（あれは）真珠なのか、何なのかとあの人が尋ねたときに、「露だ」と答えて、私も露のように消えてしまえばよかったのに。